

4 防衛問題の基本にあるもの

一国の防衛の基本は、何といつても、国民の防衛意識の昂揚充実にある。防衛力の具体化された装備やそれを組織管理する機構は、いうまでもなく大切であり、友邦との間に結ばれた防衛に関する条約ないし協定も、もとより重要である。しかし、それらを支え、その機能を十全に發揮し、防衛力全体に生氣を吹き込むものは、申すまでもなく国民の防衛意識である。

しかしながら、防衛意識が大切であるといつても、それ自体当然のことであり、そのことを鼓吹するだけでは意味がない。国民の防衛意識の昂揚は、坐して得られる贈物ではない。まず第一に、国民に対する政治責任に忠実であらねばならない政府自体が、防衛の本義とこれに対する責任にみずから徹することである。もともと政治主体の在り方が政治の基本であるからである。政策が実効を収め得るか不毛に終るか否かは、政策技術の巧拙によるよりも、政策主体の主体的眞実性にかかるところがより大きいからである。政府がしっかりした意識と責任に徹するところから、国民の防衛意識は培われるのである。

友邦との防衛に関する条約、協定についても同様なことがいえる。条約といい協定といい、いずれもこれは紙に書いた約束である。その文言もおろそかにはできないが、その約束を支える精神と、その約束を守る精神がより大切である。したがって政治の主体たる政府が、まずこの精神に忠実でなければならない。世上、往々にして条約や協定における文言の改廃が熱い論議の対象になるが、本当のところ文言の改廃自体よりも、その約束を守る精神の方が一層重要である。

このような考え方に立脚して、今日の防衛体制の問題を考えてみると、われわれが真剣に組むべき問題は、実は壮大な防衛構想といわんよりも、足下の現実によくの問題があることに気がつくのである。政府と防衛庁が、しっかりした防衛に関する責任と自負をもつてことに当ることが何よりも重要である。自衛隊の要員に対しては、深い愛情と尊敬の念を以て処遇したければならない。与えられた装備と費用については、厘毫も無駄のないように生かして使わなければならぬ。友邦との盟約の実行には、神経質なまでに周到であらねばならない。こういう卑近なことに欠けるところがあるのに、壮大な防衛論議を展開しても、それは自他に訴える真の説得力に乏しく、その実りを収穫することも覚束ないのではなからうか。まず、足下を凝視せよと私は主張したい。

一つの問題を巡る客觀的条件を分析吟味して、そこからわれわれの施策を練り直そうとする発想は、どちらかといえば西洋的な思考型である。それ自体尊いことであり、それを懈怠してよいとは思わない。しかし、わが国の今日的課題としてより重要なことは、足下を固めることでなければならぬ。

中共の核実験が緒についたことは、われわれの深甚な考慮を促す重大な与件である。この与件の發生に觸発されて、わが国の防衛論議が活発になってきておることも事実であり、それ自体、歓迎すべきことである。ただ、私がいいたいのは、今日あるがままの既存の防衛体制の充実に、われわれが熱心であり、忠実であるかどうかの反省が、すべての論議献策の出発点でなければならぬということである。

現行の日米安保条約を軸とする日本の防衛体制の充実に、真剣な努力を重ねることこそ当面の急務であり、その努力の限界に立ちいたって始めて、われわれは次の課題に有効に立ち向う資格が得られるのである。政府の対内、対外にわたる信用と權威は、実はこういう地味な努力に依存するものであり、内政の推進も外交の展開も、こういう努力を抜きにしては空念仏に終るといえる。青い鳥は深山幽谷に住んでおるのではなく、自家の軒先に巣をもつておるのである。